

てからね」

「先生が五人これだけゐてね（五本の指を示し）これだ

けが男の先生よ（四本の指を曲げ小指を示しつゝ）

# 「兼 ち や ん」

東京女子高等師範學校教授 岡 田 美 津

## 第四 病氣の兼ちゃん

吉藏は夕飯をすまずと、

「行つて用足しをしてお出で。おれが兼公を見てゐてやるから。」と言つた。

「兼坊に口をきかせてはいけませんよ。」とお芳はいつて起ち上り、皿や鉢を音させぬやうに食卓から流し元の方へと運び

「昨夜はちつとも眠らなかつたのに今日はお晝後にすこしとろツとした位だから。ぐつすり眠るといゝんだが可哀さうに。だからなるたけ靜にさせておいて下さいよ。」

夫妻は小聲で話しあつてゐた。

「今夜はすこし快い方なのかな。」と夫は氣遣はしさうに訊いた。

「あゝ、すこしは快いんだよ。だけどお前さんが今日持つて歸つて來た七面鳥卵を食べる段にはなつてゐない。」

「食べさせたら力がつくかと思つたんだがな。」

「そうだけれど。あの卵が消化出来るようになったら……食べさせてやるよ。」

「あゝ」と吉藏は愛想よくいつたものゝ、つまらなさうな顔をしてゐた。

「お前さんかくしに甘いものを仕舞つてありやしまいね。」とお芳は皿を拭きながら夫の顔をじつと見て、急に理由をひげに尋ねた。

吉藏はきこえぬ振りをしてゐた。お芳は穩かにしかし斷乎とした調子でもう一度問ひかへした。

「たゞネ菓の實がすこしはいつてるんだ。」と吉藏はやつと答へた。

「ぢやね、あの子がそんなものが食べられるやうになるまで私が預かつておかう。」

「今夜は兼公に一つだつてやりやしないよ。」と吉藏は困つたらしく言つた。

「それあ分つてるよ。」

吉藏は情なさうに笑つて戸の傍に引かけてある外套を指して、

「あのかくしから出すがいよ。」

「お前さん、自分でお出し。」とお芳は答へて「そしてその料理臺 小抽斗に入れてお置きなさいよ。」

「困つた女だな。」

「困つた男だよ。」

「さうかもしれねえ。」

「お前さんはね。すいぶん、ものゝよく解るひとだが兼坊のことゝいふとまるで子供なんだもの。」

「ほんとにな。」と吉藏はおとなしく同意した。

「だからお前さんに氣を付けてゐなくちやならないんですよ。」とお芳は優しく言ひ添へた。  
しばらくしてから、お芳は、

「ぢや、兼公を靜かにさせておいて下さい。お頼み申しますよ。私や永くはかゝらないから、そして歸りに千代ちゃんを連れて来よう。橋本のおかみさんは一日千代坊を預かつてくれてさ。あの人も親切だね、坊やはこの節、中々言ふ事をきかなくて、兄ちゃんが病氣なんだからついても解らなくつてね。」

お芳は、兼ちゃんの床を一寸覗いて見て、出掛ける支度をした「丁度よく眠つてるよ。」と嬉しさうにこゝろした。  
たつた一人になつて、吉藏は爐の前で一服やりながら考へてゐた。二分程すると、

「お父ちゃん！」といふ聲がした。

「眼が覺めたのか。」と吉藏は跳び上つて、パイプを置いて床の方へ歩みよつた。

「お父ちゃん、あたい何故棗のお菓子たべちやいけなの。」

「そ……それはな、お腹にわるいからだ。」

「だつて、あたい頭が痛いんだもの。」

「お前に、何か言はしちやいけねいつて母ちゃんがいつてたぜ。さ、靜にしてな、いゝ子だから、ねんねしな。」

「ねられないんだよ。頭が痛いんだ。棗が欲しい。」

父親は子供の頭を軽く撫でたり、肩 あたりを叩いてやつたりした。

「可哀さうにな。水でも飲ましてやらうか。」

「あたい、棗が欲しい。」

吉藏の眼は子供から離れて臺所中を見廻はしてゐた。料理臺の小抽斗が少し開きかつてゐた。

「ねられないよ。あたゐ棗がほしい。」とまた兼公が言ひ出した。

吉藏は吐息をついた。そして小抽斗をつくくくと眺めてゐたが急に我と我身を引締めて、兼公に、

「棗はやるわけにいかないよ。」と氣の毒さうにいって「お話をしてやらうか。」とほとんど困りぬいたといふ風でいつてみた。

「あゝ」と兼公が氣が乗らない聲で「棗が……」

「何の話が……？」 龍の話か。」と父は大急ぎで尋ねた。

「あゝ」と兼公はしよふことなしに同意して、「龍の話して……そしてなつ……」

早速に吉藏は、

「むかし〜一頭龍が穴に住んでたんだ。」

「その龍つてどの位の大ききなの。」と兼公はすこし面白くなつたか、問ひかへした。

「それはな、お前が動物園で見たとの獸よりも大きいんだぜ。そして身體中に鱗が生えてゐてな。そして口から火や煙を吐くんだ。だから人間がその穴のそばを通るとプープーと火を吹つけて、その息で焼き殺して喰つてしまふんだ。」

「何故、人間は水を掛けないの。」

「ほんとにな、……何しろ人間は水を掛けなかつたんだ。するとそのくにの王様がな、その人間が喰はれてしまつちや、今に年貢を納めたり王様のお通りの時に萬歳つていつてくれるものも無くなつちまふだらうと思つて、澤山お觸れのかきつけを印刷して市中に貼りつけて、誰でも龍を殺したものは、財産を半分やつて、おまけに美しいお姫様を御嫁さんにやると仰つたんだ。それで、若い殿さま達がおれが命がけで龍を殺してみせるつていつて出掛けていつて、みんな龍に喰はれちまつたんだよ。」

「龍を鐵砲で打てばいゝぢやないか。」と活氣づいて兼公がいつた。

「あゝ、だけどまだ鐵砲のない時分たつたから。」

「さうか、それからな。」

「浦團をよくかけて居なくちやごめんだぜ。それからな、何百人つていふ若い立派な男が焼き殺されて喰はれたあとに一人の百姓が出て来て、私が一つやつてみますつていふんだ。するとみんなが笑つてほんとにしねいんだ。今までの人はみんな戦争の出来る軍人さん達だつたんだもの。でもその百姓は腹も立てねいで、刀を一口と盾を二つくれたつていつて、それを貰ふと氣樂さうに鼻唄をうたひながら自分のうちへ飯をくひに歸つていつたんだ。ちやんとお腹の中に考がきまつてたんだから。それからあくる朝になると自分んたちの牛やら、羊やら、鶏やら、鶯鳥やらをのこらず引出して、龍の穴んとこまで追つていつたのさ。すると龍は七日ばかり立派な軍人さんを食べなかつたんで、ひどく腹がへつてたんだ。だもんで、牛だの、羊だの、鶏だの、鶯鳥だのがやつて來たのを見ると、舌なすめりをして穴から出て來てプープーと息をかけては焼き殺してみんな食べてしまつたのさ。すとお腹がもう太鼓のやうにふくれてしまつたから、一とねむりしようつていつて穴へのそく歸つていつたんだ。しばらく眠つてゐると、その百姓が「こら、起て來い龍の奴め、刺しころしてやるから出て來い！」と怒鳴つてゐる聲で目を覺されちまつたんだ。だが龍が何ともいはなかつたものだから百姓は穴を覗きこんで、刀でもつて龍の眼をグサと刺してそれから……

「龍の眼をくりぬいたの。」

「くりぬかないけれど、ひどく刺したんだよ。すると龍めがまたプープーと百姓に息を吹きかけ始めた。ところが牛だの羊だの鶏だの鶯鳥だのを食べたあとだから、息がきれてゐてうまくいかないんだ。その百姓は盾でもつて龍の火と煙を防いで、も片つ方の眼を刺しておいて「出て來い！ 首をちよんぎつてやるから！」と怒鳴つた。龍は怒つてムーンと唸つ

て百姓を擱まうとしたんだが、何しろ腹はふくれてゐるしおまけに眼は半分見えなから穴から首を出すのが早い、百姓は背のびをして力一杯に刀をふりあげて龍の首を切り落してしまつた。それで龍は死んぢやつたの。それから……

「血が出たの。」と兼公は夢中になつて訊いた。

「出たとも、そして百姓は王様の財産を半分もらつてお姫さまをお嫁さんにしてめでたくくらししたのさ。これで龍の話はせしまさ。」

「も一つお話。」

吉藏はもう二つお話をしてやつたが二つ目の終りになつて兼公が、

「あたい龍のが一番好き。お父ちゃん抱こしておくれ。」

「しけな〜。床を出ちやしけなよ。」

「よくくるんで抱いてよ。」

結局父親は負けてしまつて兼坊を毛布にくるんで、臺所をあちこち抱いて歩く事になつた。

「兵隊ちゃんのやうに歩いて。口笛を吹いて……樂隊のやうにね。」

吉藏はいひなり次第に口笛を吹いて兼公がもういよといふまで臺所中を行軍した。

「唱つてよ、お父ちゃん。」

「お前、頭いたくないか。」

「さつきより快くなつた。唱つてよう。」

「よし来た。」といつて父親は子供を抱いて爐の傍に坐つた。

「戸外が見たいな。」

そこで二人は窓のどこへいつて下の往來を見ると丁度街燈が點くところだつた。吉藏は點火夫の歌を小聲に唄つてきかせるとも一つくと兼公がいふので、とうくと五つか六つとどけさまに唱つてやつた。こんどは火のそこへ戻るといふので爐のところへ來ると「ちいさい鳥が……」を唄つてくれるといひながら兼ちゃんは父の首に抱きついてしまつた。その歌の節が氣にいつたのか、父がうたひながら體をゆすぶり、片手で兼公の肩を叩いて拍子をとつてゐる間じつとしてゐた。それがすむと少時だまつてゐたがやがて、ものうげに、

「ランプの歌をもう一べん。」

それを父親がおよそ三十回もくりかへして靜にうたつてやつてゐるうちに、兼公はほんとに寢入つてしまつた。

十分後にお芳が眠つてる千代ちゃんを抱いて、はいてくるときには吉藏はうす暗がりにぼつ然と座つてゐた。

「坊は眠てゐますの。」お芳が心配さうにきいた。

「ゐるとも。」

「それはよいあんばいだ。私の留守の間に目をさまさなかつたかしら。」

「ほんのしばらく。棗の菓子はやらなかつたよ。」といひくと吉藏は笑つて小抽斗を指さし「だが、やりたくつて困つたよ。」

### ○みどり會々員諸姉へ

會員名簿を作らうと思ひます。

住所と奉職園名、と氏名(改名の方は舊とお記し下さい)を母校幼稚園内幹事あて、で早速お送り下さいませ。なほ、この雜誌をご覽にならない、お知合の會員がございましたら、そへてお知らせ下さるようお願ひ申上ます。

みどり會 幹事